

終わるといふ事は始るといふ事。

茗溪塾塾長 宇野 雅春

中学受験は終わり、高校受験、大学受験もいよいよ大詰めを迎えています。「受験」というのは目的を達成するという意味では、近くなるほどに煮詰まり、緊張もクライマックスを迎えますから、合格発表の後は、「終わった！」という感慨で、しばし呆然とリラックスの日々に突入することが多いのですが、果たしてそれはいいことなのか？とこの頃考えてしまいます。「結果良ければすべて良し」という結果主義が、一番説得力はあるのですが、プロセスはどうでも良いことなのでしょうか？

本当はプロセスの中に自分の将来を決定づけるような大きな要素があるはずなのです。もしくはプロセスを反省するところに大きな進展の要素が隠れているといってもいいかもしれません。「成功」と「失敗」のどちらにも大きなヒントがあるはずなのです。

あるいはそのヒントを基にして前に進むという事がとても大切なことだと思うのです。

中学生と高校生はいよいよ大詰めです。まずは全力投球をしてください。くよくよ考えるよりはまずは、ベストを尽くすことが大切です。何事を行うときは、迷いがあつたとしても、やれることの全力を尽くすことが大事なことだと思います。

中途半端にやった時は、悔いもさほどなく、したがって教訓化できることもなく、また同じようになんとかやることで、再び同じ失敗を繰り返すことになります。

悔いることや反省は、終わった後でいいと思いますが、その時は嫌な気持ちになっても、必ず教訓になることがあります。「後悔しても始まらない。」と一般的には言われることですが、今の脳科学の最新情報によれば、「後悔」が次への大きなステップを生むため「後悔」は大いにすべきことで、そこから新しい発想や次への成功が導かれるという事なのです。

逆に「成功」が次の失敗を招くこともあるし、成功し続けることで奢ると大きな失敗に遭遇することもあるという事です。

未来がある若い人にとっては一つ一つの経験が必ず自分の将来の糧になります。中学受験を振り返ると、子供たちだから越えられる精神力を感じるものがたくさんあります。

不合格が出た時のショックは多分とても大きいはずですが。初めて自分が世の中から拒否されているという感覚…。想定していないことなので、とても落ち込むと思います。ただ今の中学受験の実態からすると、順調に合格だけしていく受験というのはほぼ皆無で、上位校に行けば行くほど確実性は減ります。「自分だけじゃない！」という事です。

不合格が出た段階で、子供たちはそこから前に進むために葛藤することになるのですが、子供の持つ楽観性が救いになります。一日はめげても次の日は、前に進めるという事。

ただし、不合格は次の成功に大きく貢献することが多いものです。「あの時のつらい思いが今の成功を導いた」と成功している人は必ず言います。むしろつらい失敗があつたからこそ次の大きな成功ができたという事なのです。言い換えるとより大きな成功を得るために人はよりつらい失敗を経験するという事なのです。努力もつらい思いもなく成功する人はいません。人生は山あり谷あり、明るく楽しいことばかりがクローズアップされますが、華やかに見えるものほど、そのための地道な準備と大きな苦労があるのです。楽しいことだけやっていきたいし、またそれを実行している人がいるとしたら、その「つけ」は、何かの形で必ずめぐってきます。

何かをはじめるとして、必ずそこに終わりがやってきます。良い結果であればあるほど、次のスタートは切りにくいものです。そこにとどまり何事かをやり遂げたように思うのは全くの見当違いです。良いこと半分、悪いこと半分、それが人生です。一番輝いた人も無念の涙にくれた人も私から見ればいろいろな要素が組み合わされて出た結果にすぎません。良い時も、悪い時も「自分」が試されます。終わりがあれば、次は始まり！終わることのない繰り返し…。喜びは一瞬、大切なのは多分その次に来ることだと思います。